「人を育む環境」でシンポジウム

想像力とは何か

シンポジウムに耳を傾ける来場者

近藤　高田社長の熱い思いが伝わってまいりました。今回のシンポジウムは、基調講演・プレゼンテーションに引き続き、有異議で楽しいお話が皆様からお伺いできることと思います。それでは高田社長からご案内下さい。

高田　今日のパネラーに共通していることは「ものを見る。観る。そして考える。想像して創造する」点であります。想像力のなかでものが生まれてきます。目に見えない部分が大事です。目に見える部分と見えない部分が想像力で結合する。目に見えないものごとに血液が流れ、命が育まれていくのです。

秋山先生は昨年秋山孝ポスター美術館長岡を宮内に開館されました。85年前の旧銀行をリノベーションとしての開館でした。建物は第3回長岡都市景観賞を受賞されました。美術館で展示するというハード活動と加えて美術館活動をするのだと明言されての出発でした。見事、年5回の美術館大学を開催され、先月は第8回目の美術館大学を上組小学校の校長先生と先生方をお迎えして「見ると考えると育む」について話し合いがもたれました。聴講者も50名前後と美術館一杯になりました。先生から見られた想像力とは？

高田社長（右）と司会の近藤さん

秋山　自分の意見を自分の責任をもって言う。強い責任感が重要です。具体的なスローガンを掲げる必要がある。抽象的ではなく、具体的な実践の連続が重要になります。

そういう意味で想像力を育む環境が必要です。自然、親、コミュニティの中から生まれてきます。外国へ講演に行くと、どの国の人たちも自分の生まれた街（原点）が大切だと言います。

美術館には心を浄化する力があります。1人静かに来てじっくり絵を見てほしいですね。すると良い考えが浮かんできます。

高田　ゴルファー石川遼選手が小学校4年生の時にタイガーウッズの優勝シーンをテレビで見た。その時の強烈なイメージを自分において明確な目標を小学校6年生の時の卒業作文に認めたといいます。育ての親であるヨネックス米山会長の長商100周年記念講演は「夢を追うものだけが夢を叶える」でありました。特に小学校4年生の時のイメージは人生を左右する時期だと言われています。私も息子が小学校4年生の時に斎藤先生の新潟県立科学博物館で開催された親と子の建築講座に出席させていただきました。先生は子供達に模型を作らせて小さい時から触れる場面を多く演出されました。育むためには長時間がかかります。教育者としての部分から始められたのか？建築業界に対する警鐘からなされたのでしょうか？

斎藤　今年の夏、富山で日本建築学会の大会が開催されました。大会の全体テーマは「つなぐ―継承と創生」でした。建築というのは非常に難しい世界です。ただモノを作るだけではありません。人間、自然、社会を相手にします。建築学会の目的は学術・技術・芸術の発展。それをどういう風に融合できるのか。

うまくやらなければ、これからの社会はうまくいかないとの基本的認識がありました。

もう1つは具体的にいうと姉歯事件です。姉歯さんが牢屋に入って罰を受け、責任のあり方をきちんと議論できていればよかった。耐震設計など難しいことには触れないでそういう総括がない。学会としての中立的立場からもっと発言すべきでしょうね。

AND展という形にする時に思いついたのが17年前に始めた「親と子の建築講座」です。子供たち、学生達を含めてものづくりを現場で味わうというイベントにしたかった。さらに理念的なものを形にして残したい。さらには構造設計だけではなく、総合的な環境作りやまちづくりです。新しい言葉を作ることによって4000年昔にも戻れる、これからの環境を語ることがいいと思います。

居心地の良い空間とは

高田　先生方のお話を聞いて共通なことは難しい技術を知っている人が優しい言葉で語ってくださるということです。子供達と繋がるきっかけづくりは分野が別でもその手法の絶妙さは同じだな～と感じ入っています。

斎藤先生からまちづくりの話がありましたので、弊社の取り組んでいる間知づくりについてご紹介したいと思います。弊社ではまちづくりを間知づくりと呼んでいます。間を知ると書きます。距離感が大切であるということをそのまま文字にしたのですが。人間関係が人と人を育みます。同じように家と家の関係が間知づくりを育みます。

まちにすまう人々の快適性を計る1つにベクトルがあります。方向と距離のとり方が大きく影響するからです。どんなに親密者でもいつでも正面で向かい合っていては窮屈になります。ちょっと目線をふるだけでも居心地がよくなることが多々あります。

事例としては：①ミトロの森（見附市にあるメディカルタウン：5診療所群）の配置は宇宙のビッグバーンをイメージして入り口方位も皆別方向を向いています。②柿木通り（新潟市亀田：19区画分譲土地）の道路配置は柿の木を残しながら計画されているので一直線では無くクネクネと曲げて取られています。そうすることで視線が遊び同じ敷地面積でも広く感じることが出来ます。③陽光台の間知づくり（長岡ニュータウン：12区画分譲土地）は整備公団で区画したものを引き取ったものですから区画は決まっていました。そこで共通ツールとして1：5以の遊歩道を皆で出し合う仕組みを造り、ゲートで共通言語とさせてそれなりの群を造ることができました。④リプチの森（長岡市摂田屋5丁目：48区画分譲土地）は長岡自動車学校の跡地を分譲したものです。中央を直行する道路は1／fのカーブをもった快適な揺れのある間知づくりです。摂田屋にある原風景に水の流れる景色があります。時を告げる水門柱は19箇所設置されており、10時・12時・3時・6時と水が流れる仕組みになっています。特に暑い夏は水が流れると大人も子供も水の周りに集まってきます。コミュニケーションが生まれます。鳥達も程よい距離感を持って集まってくる姿は絶景でもあります。間知づくりは実は人を育む環境づくりの1つでもあるのです。

シンポジウムパネラー

近藤　人を育む環境について、それぞれの分野で話して頂きました。子供達との活動が多いですね。秋山先生に伺いたいのですが、ネパールの子供と日本の子供の違いは何でしょうか？

秋山　ネパールの子供とは学校教育が違います。絵をうつすことはやりますが自分の意思で絵を描くことやコミュニケーションの道具としては描いていません。絵は絵であり。紙がもったいないから絵を描かないのです。地図も書けません。そういう生活をしています。

ネパールに絵を描く力をつけるためには、先生たちのために教科書を作らなくてはなりません。根付くには時間がかかります。それができれば日本の子供たちのように絵によるコミュニケーションができると思っています。

たとえば日本ですと仏教の教えを説明するときなど。よどみなく喋るお坊さんがいて絵と言葉で解説したりします。現場にいけばそれでも子供たちは「おもしろい」といい理解し感動します。

近藤　高田社長がお考えになる居心地の良い人を育む巣舞いとは？どんな空間でしょうか？

高田　巣舞づくりも間知づくりと同じく、家族であっても適度な距離感を大切にすると居心地がよくなります。人は誰しも皆とわいわい、がやがやしたい空間も欲しいが、自分だけの空間も必要です。間知の中に我が家があるが、同時に我が家の中に間知があるといっていいかもしれません。感動する空間があると人は初めは刺激を受けるのですが、慣れてくると当たり前になってきますよね。

空間＝居心地の良い巣舞と考えがちですが、逆説的な言い方をすれば、居心地の良い家は実は余りいいものではないという話があります。旦那が早く仕事を切り上げて帰ってくる。仕事中毒を良いとは言わないが、仕事をしなくなってくるのは？と別方向からの警鐘である。ちょっと穿った見方ではあるが、むしろ旦那が帰りたくない家を造るべきだと。仕事をしたくなる環境は今後とも重要であるが。この様に時（T）と場所（P）と状況（O）に応じて人の受け止め方はどんどん変わる。変わることで人たちを巣舞いの中で育んで行っている。

完成後の住んだ後に訪問させて頂くと新しい発見がある。設計・建設当初とは思いもよらないま居方をしておられるのである。生活しているうちに益々昇華して育んでおられるご家族にびっくり仰天でもある。要するに「計画者」を通り越して「生活者」のレベルをどの位予知できるかが居心地の良い育む巣舞づくりのバロメーターになっていると言ってもいいと思います。

近藤　あっと言う間に与えられた時間がやってまいりました。皆様お1人1人から「人を育む環境」についてまとめて頂けるとありがたいです。

稲川　長岡は人づくりのまちです。高田さんは建築の中で人づくりをしておられる。過去の長岡の歴史は人づくりをやってきた。高田さんも頑張って教育環境を作っていくこと。学ぶことができる家を作ってほしいですね。

秋山　以前街づくりのことで講演した時、街ってなんだろうと思いました。時代を動かす優秀な人が多くが産まれる街があります。その街には美があるといわれていますが、ちゃんと知恵やヒントは日常のなかにあったのですね。

斎藤　歴史は好きで今日の話の中でも一杯出てまいりました。話の共通点は人間、その生き方というものを強く感じました。マチュピチュに行った時、遺跡の前で立ちすくみ、息を呑んだ。彼らにとっては自然と共生しながらハッピーな生活だったと想像されます。

今文明が発達して経済が爆走していますが、人間は本来どうやったら幸せなのか考える必要があります。人間にとって大事なのは人間力としての知力や情緒です。これからの社会において知力と情緒をどのように育んでいくのか。国全体で考えていくことがすごく大事です。日本は自然に恵まれているから豊かな風土の中で人間が生きている世界を改めて考えて生きたい。とても今日は勉強になりました。

高田　築縁様のSさんからメールがやってきた。「高田さん家を建てて困ったことがある。今までは旅行が好きで温泉が好きで休み毎に出かけていたのに、今では自分の家が一番良くどこにも出たく無くなった」と言うのです。ファサモンドと命名された巣舞いのネーミングとその物語はハードソフト両面から巣舞い人を育んでくれている。弊社では見学会含めて全ての建物に名前をつけている。人も固有名詞で呼ばれたときに、ピシッと背筋が伸びる感覚であるが、無ければ第三人称の感覚を免れない。

巣舞い人を育むには名前をつけることであり、好奇心をもって育てつくり上げていくことである。論語にある言葉を引用すれば、今回のパネラーの皆様のように、「知ることは好むことに如かず、好むことは楽しむことに如かず」と言うことになります。楽しい巣舞づくりこそ人を育てる空間であることを再認識したいと思いました。

さて、育むには知育・体育・徳育がございます。食育も大切なテーマであります。今回は巣育のお話をさせていただきました。今回はVol.2～3・4と継続できることを期待して会を閉めさせていただきたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

近藤　「育む」という言葉をテーマに話しあってきました。優しさが込められたシンポジウムになりましたこと感謝申し上げます。

（おわり）

（司会）近藤麻智子さん

基調講演「龍馬を育てた女性たち」

河井継之助記念館・稲川明雄館長

稲川明雄氏

心の教育に木のぬくもりを

歴史においては温かい人生を送る人もいますし、冷たい人生を送る人もいるわけでありますが、我々は温かい人生を送るための家を持っております。その反面に激動の時代に生きなければならないという宿命もあるわけです。

今現在、日本は大変な激動の時代にあり、明日の希望もない時代だと言われています。また借金体制のなかで、未来に借金だけが残るような時代となっているわけです。せっかくですので、良き家に、温かい人生を刻みたいものです。

坂本龍馬は河井継之助、小林虎三郎と同じ歴世代を生きた人物です。夢を追って京伏見の寺田屋へ行き、慶応2年1月23日に襲撃され九死に一生を迎えるのですが、このとき助けた女性がお龍です。

そのお龍という人間が今日のテーマになります。

お龍は、坂本龍馬を助けるという大変ドラマティックなことをやって、最終的には坂本龍馬の妻になるわけですが、常にピストルを撃っているような、なんとも男勝りで常識とは無関係な女性でした。

龍馬はお龍を含め乙女、千葉佐那、お登勢の四人の女性に育てられました。坂本龍馬には欠かせない女性たちです。

寺田屋の脱出が日本の歴史を変えた

坂本龍馬の系図を見ると、龍馬は父・八平と母・幸の間に生まれました。龍馬と一番上の兄・権平とは、間に千鶴、栄、乙女の3人の姉を入れ20歳ほど年が離れています。系図が長岡の山本五十六と少し似ています。そして、河井継之助にも似ています。姉さんに育てられ、甘え、子どものころから姉の影響を大きく受けています。

龍馬は慶応2年1月23日に寺田屋で襲われました。1月23日の午前3時ころ、お龍は風呂へ入っていたのですが、役人が来たということで階段を上り、着るものも着ないまま坂本龍馬とともに窓から逃げました。高台の暗がりの方へ逃げ九死に一生を迎えました。部屋の間取りによって難を逃れることができたわけです。ですが、それだけで事件は終わらないのですね。

坂本龍馬は四方八方を取り囲まれるのです。そのときピストルを撃ち応対していました。ところが、6連発のピストルの弾がなくなるのです。坂本龍馬は右の手首、左の手首と襲撃され動脈が切れ、必死に逃げついた先が材木屋さんの上だったのです。

このようにして薩摩藩から逃げきったわけです。

知恵やヒントは日常のなかに

寺田屋というところにお登勢という女性がいます。この女性は寺田屋六代目、伊助のもとへ嫁ぎ、大変な苦労をします。このお登勢がいたからこそ坂本龍馬は海援隊について大変勉強になったのです。寺田屋は当時、京の伏見から太秦へ向け物資を運ぶ船便を扱う船宿で、人間をあまり泊めませんでした。しかし坂本龍馬は寺田屋の2階に泊まることが多くありました。とはいえ敵なども来るわけです。特に、近藤勇はお龍を好いていたものですからよく来るのです。お龍は近藤勇が来ると龍馬に知らせ逃がしていたと言います。

このように、船宿にあまり人を泊めない寺田屋でしたが、お登勢は長州藩などを泊めて、特に龍馬を可愛がっていたのですね。

龍馬はお登勢によって何を学んだかというと、商売というものです。淀川には船宿が40軒あり、お互いにお客の取り合いがあったわけですね。伊助は放蕩者でしたので、お登勢は夫に代わり経営の手腕を発揮していました。しかし女性は腕力で負けてしまうのです。その負ける腕力を、どうやったら知恵で勝つか。

お登勢は船足を速くするため、船頭を5人から8人に増やし、船を二十石船から三十石船へ増やし、たくさんの物を積めるようにした。すると寺田屋が流行るようになったのですね。そのあたりを龍馬は見たわけです。そして、これは海援隊などの基礎となったわけです。

我々は坂本龍馬という人間は素晴らしい人物で、日本を開拓していると言いますが、ちゃんと知恵やヒントは日常のなかにあったのですね。

常識に捉われないことが大切

龍馬は嘉永6年に江戸へ出て北辰一刀流・千葉定吉に入門し、このとき千葉佐那に出会います。佐久間象山に入門したのが嘉永6年12月です。

龍馬は幼いころは大変な問題児でした。12歳までは学問も剣道の練習もろくにしなかった。乙女も龍馬の出世だけが生きがいだった。しかし、お龍が坂本家に預けられると喧嘩をして追い出されてしまう。それは姉さんが剣道を習わせたら、ぐんぐん芽を伸ばし上達して行った。

乙女がいなかったら龍馬はいなかったわけで、龍馬にとって乙女という姉さんの存在は大きい。乙女も龍馬の出世だけが生きがいだった。しかし、お龍が坂本家に預けられると喧嘩をして追い出されてしまう。それは姉さんが剣道を習わせたら、ぐんぐん芽を伸ばし上達して行った。

女性の戦いなのかもしれませんが、坂本龍馬という人間を育てた人間と導く人間の違いだと思います。

お龍は明治33年1月15日66歳のときに亡くなりますが、龍馬の妻であることが何よりの勲章だと遺しています。

このように、龍馬は自分の人生において女性をうまく動かし女性を好きにさせながら、自分の肥しにしていった。日常からヒントを得て失敗を成功に変えてきました。

家は女性そのもの

龍馬の上手な世渡りは、長岡の河井継之助や山本五十六に似ているものがあります。激動の時代では注目を浴びる演出を自らできる人間が、生き残ったのでしょう。そういった点からして高田建築事務所さんは、顧客が必要とする要望に応じ住みやすく機能的な設計をしてくれます。その場その場で一番良いものを提供し、明日の夢を架けているのだと思います。建築でも、過去の失敗をより良く変えていくことが重要と思います。

高田建築事務所さんが建てた家は、みんな違うのですね。ですから、どこの家へ行っても話題が違い、それぞれに物語があるのです。動物は住まい、巣穴を大切にして、そこに自分の原点を置きます。そしてもし不幸なことがあっても必ず帰ってきます。それらのことを考えると河井継之助、山本五十六、坂本龍馬といった幕末維新の志士たちは、より良い家を求めていたことがわかります。

また、この3人に共通するのは、不幸の最期を遂げたことです。坂本龍馬のような人間になりたかったら、不幸になっても良いという度胸が必要なんでしょう。河井継之助のような人間になりたかったら、自分がダメになっても良いという度胸が必要です。この度胸を、またマイナスをどのようにプラスに変えていくかが重要です。

家庭教育ができる家であることが必要

龍馬を愛した女性たちは、彼の顔を見ると安心して素直な気持ちで話し、苦労を忘れたそうです。皆さんも同じではないでしょうか。会社などで嫌なことがあっても、帰ってくると安心する。これもまた家庭教育・家庭環境であり、そのためには、そういった家でなくてはいけません。

家というものは女性そのものではないかと思います。